

古へを仰ぎて今を戀ひざらめかも

土田龍太郎

古今和歌集の初めに載れる紀貫之の假名序、讀むごとにさまざまの尋ねまほしきことのわが心にもも浮びきて止めむかたさへなければ、かかる問ひごとどもみなながら書き列ねむははたあいなければこそせせでもありなむかし。

さはれこの假名序の末に貫之の記せる、古へを仰ぎて今を戀ひざらめかもてふ一句、いかにぞやいとよしありげにおぼえて心にかかりたれば、この一句の典故のことおのがえ及ぶほどは勘へ見ばやとてなむわが年ごろ思へるよしなしごと左に述べまくほりするなる。

貫之の假名序、はじめに大和歌の出で來たりし源を尋ね、またその世と移り變れるさまをつばらに説き、つぎて近き世に名を得たる六人の歌よみの歌のさまをもあげつらひて、さらに古今集撰進のゆゑよしを記せし後、延喜の聖代に會ひて大和歌の絶えざりしことの慶びを述べたれども、その末に至りて歌のさまを知りことの心をえたらむ人は大空の月を見るがごとくに古へを仰ぎて今を戀ひざらめかも。

と記して讚へ言を結べり。

この讚へ言、紀淑望のものせる眞名序にはたえて見えず。延喜七年、大井川に御幸ありしついでに、宇多法皇の供奉しまゐらせし群臣に仰せて大和歌詠ましめたまひしみぎり、貫之のつかうまつりし序、古今著聞集に載りて今に遺りたり。貫之この大井川行幸序をとぢむるに

この言葉世の末まで残り、今を昔に比べて後の今日を聞かむ人、海人の栲繩繰り返し忍草の忍ほせつらめや。

と言へれど、このところのおもむき右に引ける古今集假名序の末の讚へ言の心によく通へり。されば古へを仰ぎてと言ひて假名序を結べりしはよそ人ならず、この句なほ貫之の筆になれること疑ひなし。

假名序の註釋のたぐひあまたある中に、古へを仰ぎて今を戀ふる貫之の言の葉を、後の世の人古への萬葉集を仰ぎ今の古今集を慕はではあるべきふ心に解けるものなきにあらねど、かかる解きさまあたりとしもおぼえず。貫之ここに萬葉集に思ひ及べりとせむことさらにいはれなきにたり。後の世の人のわがみにとりてはすでに古へとされる延喜の御世をばかつは仰ぎ尊び、かつはまた貫之らにとりては今の世にほかならぬ同じ延喜の御世を戀ひ慕はむことのなくてやみなむやは。一句の心あらあら延べ言はむにはおほかたかくのごとくにこそ説くをうべからめ。古へを仰ぐといへる上の半句の古へと今を戀ふといへる下の半句の今とは、文字のうへばかりにてこそ逆しまなれ、ひとしく延喜の聖代を指せりと思はではあるべからず。かく思はざらましかば、貫之の言葉のあやのおもしろき一ふしつひにあらはれでやみなまし。さるはいとほいなくうちをしきわざならざらめやは。

貫之の文作りの才のかしこきは言ふもさらなれど、假名序と行幸序の右に引ける讚へ言に似かよへる句ほかになきにしもあらず。かの日本後記、承和七年に撰進ありしとき、藤原緒嗣等が奉れる序に曰へらへく

勅以成四十卷、名曰日本後記、其次第列之如左、庶令後世視今猶今之視古。

後の世の今を視ることなほ今の古へを視るがごととしてふ一句、古へを仰ぎて今を戀ふてふ貫之の書

きざまにつゆたがはずとしも言ひがたけれども、おほよそのおもむきのあひ通へること誤りなかるべし。

緒嗣等がこの句、もはらおのが巧みもて考へ出せるにはあらで、漢土の騷人の美辭によれることまた疑ひなきにたり。書聖の名に流れたるかの王羲之、晋の永和九年春に會稽山陰の蘭亭に時賢を集へて修禊のことあり、次ぎてまた流觴曲水の遊びありて一觴一詠に幽情を叙べしめしとき、みづから序を記して志を申べたり。この蘭亭序一首さながら晉書本傳に載り、また眞蹟こそとく失せられ、法帖と拓本あまた遺りて逸少の筆跡今に傳はりたれば、知らぬ人としてあるまじけれども、同じ序に右に引ける貫之と緒嗣の句にいと似かよへる書きざまさへあることに心づける人は世に稀なるべし。蘭亭序の末に曰へらく、

固知死生爲虚誕、齊彭殤爲妄作、後之視今亦猶今之視古者悲夫、故列叙時人錄其所述、雖世殊事異、所以興情其致一也、後之覽者亦將有感於其文。

ここに羲之の悲夫といひて歎けはいかなる心ならむ、ややいぶかしければ、緒嗣と貫之の句の蘭亭序末節とたがへるところたえてなきにもあらざれども、おほかたの措辭と旨趣のあひかなへるは、緒嗣と貫之のおがじし羲之の記せるところに效ひて文綴れりしゆゑならではあるべからず。

王羲之の蘭亭にて催せし雅會の曲水宴にほかならぬこと言はでもしるかるべし。曲水宴の始まりしはいつのころなりや、しかとは定めがたけれども、東漢章帝の世にはすでに行はれたりしこと疑ひなきにたり。本朝にてははや顯宗天皇の元年に曲水宴せさせたまひしこと日本紀に見ゆ。されば曲水宴の由來いとはるかにして、東晋代に至りて王羲之が始めしにはあらざることげにまぎれなし。しかはあれども、およそ曲水宴とだにいむに、漢土にまれ本朝にまれ、いささかにも翰墨に親しめる人の、かつは會稽蘭亭の故事を偲び、かつはかのをりに王羲之のものせる蘭亭序に思ひ致さざらむことかつてありうべからず。

若きころ大學寮にありて志を稽古に勵ましたれども文章生にはならでやみぬるは、いかなるゆゑにやありけむ、いささかいぶかしけれども、後には御書所預をえ務めたりし紀貫之の漢才のかたにいとかしこかりしこと、さらにあやしむにたらず。加へて能書の譽さへありしこの貫之、世にならびなき書聖なる騷人の王羲之を敬ひ慕ひてやまざりけむことまことに思ひ測るにたへたり。蘭亭序のごときはただ一とほり覽しのみにはあらで、つねに讀み習ひてほとほと語むじあたりしなるべし。

三日三日紀師匠曲水宴序といへる短き文なほ遺りて、貫之躬恆ら八人の歌人の、三月三日の曲水宴に詠めりし大和歌二十四首を載せたり。もとはそなはりたりけむ躬恆の序、今は缺けて傳はらねば、この文いかなる人のいづれの年にもせしや定かならねども、貫之のただ蘭亭の雅會を思ひ偲びしのみにもあらで、みづからまた曲水宴に列りしをりさへありしことげにこの文によりてこそまぎれなけれ。貫之の古今集假名序、ただ一わたりばかりうち見るほどは、王逸少の語句にちなみありとはつゆ心づきがたけれども、右にわが述べしごとくに勘へもてきたれば、貫之の古へを仰ぎて今を戀ひざらめかもの一句、蘭亭序の末節に據れることをさをさ誤りなきにたり。貫之の假名序を記せしとき、すでにそらに覚えぬたりけむ蘭亭序の佳句のふと心に浮べるままに、そをおのづから藉り用ゐておのが讚へ言をどちめたるはげにさもあるべきことにてさらにいぶかしみ思ふべからず。

敷島の大和言葉をたてぬきにしてめでたくあやなせる紀貫之の假名文に王右軍の佳句のいとさりげなくて織りこまれたるさま、世のおほかたの物知人にとりては思ひのほかなるべければ、いみじくお

もしろきこといはむかたなし。漢土の書聖王羲之と本朝の歌仙紀貫之にかかるちなみあることゆめ輕しめ思ふべからず。このこと知れる人たえてなきにしもあらざるべけれども、わが見し古今序註解のたぐひには王羲之に説き及べりしものさらになければ、このことわが親しき人々にだに告げ知らせまほしとてなむおほよそのおもむきばかりここに記しておくなる。

(平成二十九年九月十一日受附)

(注) 筆者より次の記事を追加して欲しいと要望がありましたので、そのまま轉載します。

「文語の苑」メルマガ第七十一號に載れる拙文「業平に才學ありしや無かりしや」に「三大實録」と記せるは誤りなれば、「三代實録」に御訂正くだされたく、この旨平に御願ひ申し上げ候。